

3 地域夢プランのとらえ方

～検証と未来へのアプローチ～

(1)「姫路市地域夢プラン」の意義

中元孝迪氏(兵庫県立大学特任教授)

「姫路市地域夢プラン」の意義

—「分権史観」への基礎工事として



兵庫県立大学特任教授
播磨学研究所所長 中元孝迪
(姫路市地域夢プラン審査会会長)

はじめに

姫路市の「地域夢プラン」事業は、平成 16 年度から始まり、53 万市民の多くが参加し、毎年市内一円で繰り広げられた「わが町再発見プロジェクト」である。重複参加も含めた延べ人数は、市内総人口の何倍にもなる、市民が中心となった一大イベントといえる。

事業は、35 の中学校区、さらに 71 の小学校区ごとに、自主的な催しを計画し、楽しみながら、「わが町」の過去、現在、未来の姿に迫っていった。事業へのアドバイスや補助金の交付による支援など行政のバックアップもあり、多少の差異はあるものの、ほぼ均質な事業展開が図られ、多くの成果も上がったとみていい。

さまざまなイベントが行われたが、最も注目すべきは、主に校区を中心に市民が足で拾い、まとめ上げた、歴史、文化を軸とする「地域資源」の数々である。約 1,800 件にもものぼるこれらの膨大な地域資源を一覧すると、姫路の歴史・文化がいかにも深く、広く、多彩に展開しているかがはっきりと読みとれる。江戸時代の地誌『播磨鑑』を持ち出すには、若干気後れはするが、それでも、この名著ばりに“平成の『姫路鑑』”と呼んでいいほどの歴史・文化情報が、この「姫路市地域夢プラン大全集」に集積されている。こうした成果は、高く評価されるべきことであるが、これらの成果を今後、どのように地域活性化に活かしていくのか、あるいはまた、プロジェクト全体をどのように評価し、意義づけるのか。事業の全体像を俯瞰しつつ、課題等も含めて、検証してみたい。

基礎的フレームの画定

「地域夢プラン」事業が、平成 16 年度から始まったことは先述の通りだが、まず、旧姫路市の 28 中学校区ごとに策定委員会が組織され、事業企画の検討が行われ

た。自治会、婦人会、老人クラブ、子ども会、スポーツクラブ21、さらには、小・中学校、PTA、公民館などといった地域内組織すべてを挙げての取り組みであった。

事業の企画に当たっては、地域内外の専門家や研究者にもアドバイスを受け、作業が進められた。エリア内に残る歴史事跡をはじめ、伝統文化、民話、優れた自然環境、あるいはそれらにまつわるエピソード、さらには、地元の産業、出身人物等にも関心を寄せつつ、さまざまな情報を集約、整理することから始めた。

こうした情報をベースに、具体的な事業を策定することになるのだが、まず、どの校区もが、事業展開を図る上で重要なポイントとして挙げられたのが、情報の共有化である。そのために、とられた手法がフォーラム・パネルディスカッション(網干など)の開催であった。エリア内のどこにどんな「地域資源」があるのか、なぜ、それはこの地にあるのか、古い歴史的遺産であれば、どのようにして守られてきたのか。こうした資源の基礎知識について、地域住民が共有できる場を設けたのである。

それらの資源について、地域の人たちが実際に目にすることができるよう、具体的な場所表示のための看板設置(増位、城乾、林田、置塩など)も企画された。また、全体俯瞰のための地域資源マップの作成(東、四郷、菅野など)を進めたところもあった。さらには、一步進めて、特に歴史的資源についての解説、地域の歴史小冊子の発行(安室、飾磨中部、飾磨西、白鷺、夢前など)を計画したところもあった。

次に、地域資源の存在を確認し、自らの知識として、それらをより身近なものにするためのウォークラリー(東光、神南など)や3世代交流会(朝日、城山など)を開催、資源告知を目指したイベントも始まった。また、写真・絵画展(大白書、大津、豊富、東など)のほか、地域ソングの制作(夢前)、黒田家にちなんで「目葉の木」の植樹(広嶺)、船場川の川床茶屋(城乾)、町並みのビデオ記録(琴陵、高丘など)、気球に乗って地域再発見(山陽)、播磨灘おさんぽクルーズ(灘)、野田川調査(飾磨東)、のじぎく栽培(大的)といった独自でユニークな企画も登場した。

こうして、事業のラインナップを眺めてみると、各校区に多く共通しているのがフォーラム・パネルディスカッション、看板設置、歴史ウォーク、冊子の制作といった事業である。事業のスタートに当たって、地域ごとに打ち出されたこれらの企画は、地域夢プランのいわば「基礎フレーム」として定着し、以後の事業の方向性を明確に示すことができた。地域の特性を多角的にとらえ、地域理解をよりよく進める上で、当を得た企画であったといえよう。

同時に注目すべきは、校区ごとに打ち出された「地域づくりのテーマ」(キャッチフレーズ)である。「感謝報恩 山の気澄みて自然豊かな文教の街広嶺」(広嶺)、「東より名城のぞむ京口門 未来につづく夢の道」(東光)、「ヨーイヤサー!灘魂!! 海・山・まつり…発しん」(灘)など、地域を強く印象付けるキャッチフレーズは、地域の一体感をよりはっきりと打ち出そうとした工夫が見て取れる。他校区のものも含め、地域夢プランの趣旨に沿った好ましいものであった。

1 地域夢プランの歩み
～はじまりからこれまで～

2 地域夢プランのかたち
～取組の類型化～

3 地域夢プランのとらえ方
～検証と未来へのアプローチ～
(1) 「姫路市地域資源マップ」の編纂

3 地域夢プランのとらえ方
～検証と未来へのアプローチ～
(2) 地域資源を活用したまちづくりと展望

4 地域資源の全リスト
～地区からの情報発信～
(1) 地区ごとの主な地域資源

4 地域資源の全リスト
～地区からの情報発信～
(2) 地域資源一覧

基礎企画の展開

その後、平成の合併によって、隣接する家島、夢前、香寺、安富の4町が姫路市に合併され、地域夢プラン事業実施の中学校区が7カ所増えた。家島、坊勢、鹿谷、置塩、菅野、香寺、安富の各校区である。これら7校区は、平成19年度から事業企画を始めることとなったが、基礎フレームは、先行28校区のものと同様のものであった。

基礎フレームは、2年、3年と、回を重ねるごとにさまざまな展開を見せた。例えば、ウォークラリーでは、全体から部分への展開がみられた。増位中学校区では、「増位地区史跡探訪ウォークラリー」、「水上てくてくウォーキング IN 増位」、「とほり史跡めぐり」といった小学校区ごとに個別コースを設定し、多くの参加者を得た。他校区でも同様に小学校区への細分化が行われ、よりきめ細かな地域資源とのふれあいを実感する取り組みを行った。

また、多くの校区で、イベントそのものにも工夫が凝らされるようになっていった。例えば、シンポジウムでも、有識者のトークではなく子供主体の意見発表会が行われたり、異世代交流事業で高齢者と小、中学生の触れ合いを深めたり、さらには、自ら地域資源を見つけだそうという積極的な動きも見られた。例えば、安室小学校区では子供フォーラムが開催され、各地区の子ども会長が、将来の安室がどうなってほしいか、どうすれば地域がよくなるか、など思い思いの意見を述べた。安富の異世代ふれあい事業では、一緒に農作業をしたり、防災訓練、しめ縄づくりといったイベントを通じて、世代間の交流を深めた。「地域の子供は地域住民の手で育てる」「自分たちは地域で育ててもらっている」という意識がより強くなったようである。また、四郷校区では「古墳あるある探検隊」が結成され、地域内の遺跡である「阿保百穴」の調査に乗り出した。「新発見」も報告されており、2日間の調査で23基の墳墓を確認し、保存状態の良否も検討され、今後の本格調査に大きな弾みをつけた。

音楽会など、ステージイベントも各校区で多彩に開催されたが、例えば、城北では、校区内の姫路西高校のマンドリン部の演奏が披露されたり、大津では姫路ウインドアンサンブルの本格演奏を楽しむなど、地域ゆかりのグループとの交流も行われ、事業の広域化、多様化が図られる様子が見て取れた。

「家島本島ウォークラリー」では、「てくてくいえしまウィズFM GENKI」と銘打って、同FM局の人気パーソナリティーが参加者とのトークを行い、イベントの様子が特別番組として放送された。メディアに乗ることによって、参加者は、そのイベント空間を共有でき、催し自体のイメージが大きく膨らんでいくことになる。「地域夢プラン」の存在価値を高めることにもつながったといえる。外部発信される自分たちの地域情報を、その地元で聞くということは、地域資源についての情報が客観化されることになる。これは、単に家島内の人々が情報の共有化を図るのに役立つということだけにとどまらず、「家島の地域資源は、自分たちのものである」という

ことをあらためて強く認識すると同時に、外部の人たち、あるいは外部の地域に対して、そのことを誇りに思い、それを積極的に発信しようとするきっかけともなる。

事業の基礎フレームでは、主催者側が何らかのイベントを企画し、それへの参加を呼び掛けるといった、一般住民側からすると、いわば受け身の催しという趣があったのだが、回を重ねるごとに内容に変化が見られるようになった。地域住民自らが、テーマを見つけ、それに向かって積極的にアプローチしていくという、一般住民主導の自主事業の展開にもつながったようである。

こうした各種事業の変化、発展的展開は、地域資源の存在をより明確に浮き彫りにし、その価値、意義等についての認知度も高まり、地域資源への思いがさらに深く、広く地域社会の中へ浸透していくきっかけをつくっていくのである。

地域への浸透

地域夢プラン事業のスタート直後に開催された各種のフォーラムで、出席者が口にしたのは、事業のための事業ではなく、また一過性で終わらせるのではなく、持続性をもった事業にしてほしい、ということだった。

現在、各小学校区が取り組んでいる地域夢プラン展開事業には、姫路市から、一件50万円を上限に補助金が交付される。事業が始まる以前から、地域における活性化事業をすでに行っていた校区もあったが、これらも包含して、全体的な補助事業として始めたものである。補助金を永続させることはできないため、一応、10年の区切りが節目とされたが、これがなくなると事業が中止されるという危惧は、当然あった。しかし、全市的に盛り上がった「地域再発見」と「地域への愛着醸成」という視点は、可能な限り継続させたいものである。

そのために、何が必要なのか。さまざまな要素はあるが、基本的には、これまで取り組まれてきた事業が、地域にいかに深く浸透しているかにかかってくる。多くの事業が、地域の人々の心の中に息づいて、そのことへの関心を持ち続けてもらうことが重要なポイントとなる。支援なしで、住民がどれだけ関心を持ち続けられるか。意識の持続は、正直、なかなか難しいが、支援終了後もにらんだ事業の取り組み、つまり、それまでに、できる限り深くその事業の地域への浸透を図っておこうとする試みも、多く見受けられた。「基礎フレームの展開」とも一部重なるが、ここでは、地域資源の認識についてさらに深く地域浸透を図ろうとする取り組み等について、見てみたい。

「地域ソング」の制作で地域を楽しくしようという企画については、先述したとおりだが、歌というのは、言わずもがなで、地域の一体化をこのうえなく盛り上げてくれる。なかでも、校歌となると、その歌詞の中に必ず地域資源が組み込まれており、関心も高く、認知効果も高い。これを、学校内だけの文化で終わらせずに、校外に発信することで、地域の活性化に寄与させようというアイデアが、灘校区で出

1 地域夢プランの歩み
～はじまりからこれまで～

2 地域夢プランのかたち
～取組の類型化～

3 地域夢プランのとりえ
～検証と未来へのアプローチ～
(1) 「姫路市地域夢プラン」の概要

3 地域夢プランのとりえ
～検証と未来へのアプローチ～
(2) 地域資源を活用したまちづくりと展望

4 地域資源の全リスト
～地区からの情報発信～
(1) 地区ごとの主な地域資源

4 地域資源の全リスト
～地区からの情報発信～
(2) 地域資源一覧

された。1番「木庭の桜」、2番「祭りの灘」、3番「仁寿の山」と校歌の中に歌われたポイントを、3回に分けてウォークラリーで回った。参加者への印象は強く、地域資源の地域への浸透を図ることに成功した例として挙げたい。

メディアとのコラボレーションについても、家島の例を挙げたが、琴陵校区が実施した姫路ケーブルテレビ「WINK」との連携も、事業の地域への浸透、継続という観点からみて好例の一つであろう。校区内でよく知られた、あるいは知ってほしいスポットを、小学生が、「まちの魅力探検隊」を組織、ビデオ撮影し、記録に残すと同時に、WINKのビデオコーナーで放映した。小学生のビデオという独自性もさることながら、メディアによって客観化された地域資源の情報を、当該地域の人々が見ることによって、地域への愛着が深まり、地域情報がより強烈な印象として彼らの脳裏、心に残ることになったはずである。

こうした事例のほか、実施事業の中で、地域浸透を図る上で評価の高かったものを以下に紹介してみたい。すべての事業を挙げる紙幅もないため、紹介されなかったものの中にも、貴重な事業が多々あったことを付け加えておきたい。

●東光中学校区 もみじ祭り

もみじを植林し、もみじ並木という地域の新しい魅力をつくろうと取り組んだ。

●飾磨東中学校区 野田川生物調査

水質調査や生態調査を行い、地域の現実を知ること、それを地域で守っていかうとする意識へとつなげていった。

●朝日中学校区 歴史フォーラム

地域が一体となって地域資源を活用しようとする意識を持って取り組んだ。

●花田中学校区 花いっぱい事業

町名にかけて、地域を花でいっぱいにして、新たな名物にしようとする試みである。

●大的中学校区 のじぎくを国体会場へ

地域資源を地域内だけに留まらず、地域外に持ち出してアピールする点が意欲的。

●書写中学校区 御幸道整備事業、木もれ日の里周辺整備・植栽事業

里山を地域で維持管理するという意図を持って、地域資源までの山道ルートを整備し、誰もが鑑賞できるようにした。

長期計画で、地域住民により山を育て管理しようという取り組みも注目。

●東中学校区 てくてく東

毎年、コースやテーマを変えながら継続実施している。現在も中学校区で実施しており、主な参加層の小学生が、他校区のことを学ぶ機会となり、交流が図られている。

●大白書中学校区 太市たけのこ祭り

活用する地域資源をたけのこに絞り、それを対外的にPRしようとする意図が明確。試食で振舞うだけでなく、即売会も同時実施し、補助金に頼らない仕組み作りに努めている。

●安富中学校区 「伝承安富」を歩く

冊子の作成とウォークラリーの内容が関連しており、一体的に取り組んでいる。

●安室中学校区 出前講座事業

ほとんどの校区は地域夢プラン事業で冊子を作成するところで終わっているが、これを講座に活用する点で発展性がある。

●香寺中学校区 郷土カルタ作成

小学生が主体となって、地域のことを広く学びながら、ものづくりを行った。

このような活動実績を通して、あらためて地域資源の存在を再確認、再発見するとともに、その情報をできるだけ広く、深く地域内外に浸透させ、また、そのことによって、地域資源の情報を地域の共通認識として持ち続けるための基盤も形成されていった。こうした状況を踏まえつつ、「ポスト地域夢プラン」事業の展開も視野に入れ、今後も地域ごとの自主的活動を継続してほしいと強く願うところである。

地域資源の発見と再認識

地域の文化、つまり地域資源を、地域の人々がどのようにして自分たちのものとして認識していくのかということについては、一定のプロセスがある。それは、まず、当然のことながら、どんなものがあるのかを「発見」することから始まる。書物を読んだり、古老や、専門家、研究者らからの話を聞き、新しい情報を得ることも個人にとっては発見ということができる。また、そのことに何らかの価値を見つければ、おのずと「保護」への情熱が湧いてくる。続いて、その文化事象に対して、新しい価値を付加しようという思いも出てこよう。同時に、自ら見つけた対象をベースに、独自の文化事象をつくり上げたいという「創造活動」に向けた感情も醸成される。そして、こうした動きを支えるのが、多くの市民の「参加」行動である。参加が多ければ、発見、保護、創造活動も活性化する。

このように、「発見」―「保護」―「創造」―「参加」という地域資源、地域文化の再認識、再生産サイクルというプロセスを経て、地域文化と地域のかかわりがより深まっていくのである。

今回の地域夢プランでは、数多くの地域資源が発見された。むろん、これまで知られていたものが大半だったかもしれないが、それらの情報は、一部の限られた人たちの間でしか流通していなかったともいえるものである。一般市民にとっては、まさに発見と言っていい。

その、発見を促す手段として多用されるのが、講演会である。特定のテーマについて単発で開催されるものもあるし、連続講座もあった。大きなテーマについては単発が多かったようだが、地域全体を広く深く知ってもらうためには、小テーマを設定し講座を連続して開催する校区もあった。地域の特定資源だけに焦点を当て

1 地域夢プランの歩み
～はじまりから～

2 地域夢プランのかたち
～取組の類型化～

3 地域夢プランのとりえ
～検証と未来へのアプローチ～
(1) 「姫路市地域夢プラン」の概要

3 地域夢プランのとりえ
～検証と未来へのアプローチ～
(2) 地域資源を活用したまちづくりと展望

4 地域資源の全リスト
～地区からの情報発信～
(1) 地区ごとの主な地域資源

4 地域資源の全リスト
～地区からの情報発信～
(2) 地域資源一覧

るのではなく、先人の足跡を細かく拾い出し、その中から地域の文化を抽出するという地道な作業も行われたようだ。安室地区の「連続歴史講座」や「古文書学習事業」は、その好例で、専門性も比較的高く、まとめの小冊子も充実している。地域の歴史文化を、地域住民に確実に再認識してもらおうという意欲がうかがえるものであった。地域資源、この場合は地域の歴史資源であったが、その全体像を広く認識してもらうことに成功したとっていいかもしれない。地域の人たちにとって、多くの「発見」があったと思う。

先述の四郷校区における古墳探検なども、「発見行為」そのものだし、また、例えば、城乾校区の「川床まつり」なども、興味深い事例と言える。

船場川は、姫路城の外堀として、城と城下町建設の設計図、いわゆる「縄張り」に組み込まれたが、江戸初期の城主・本多忠政時代になって、大改修が施され、飾磨津と城下を結ぶ舟運が開かれた。近代に入ると、屋形船などを浮かべて船遊びをした痕跡があり、それを模して、地域夢プランでは「川床まつり」を開催した。「川床茶屋」を設置して、地元の人たちだけでなく、観光客のもてなしにも使われ、話題を呼んだという。

このイベントを通じて、船場川の歴史的役割を再認識し、川の美化という「保護活動」も積極的に行われ、来訪者への「もてなし文化」という新しい価値を創造することに成功した。校区の多くの人たちが参加し、そうした歴史的な文化環境をあらためて認識し、保護、創造活動を支えるという、プラスの循環が生まれたのではないだろうか。

むろん、堅苦しいイメージの「講座」や「学習会」といったものだけが、発見や、再認識の手段ではない。レジャー性に富んだイベントも、地域資源を発見し、保護し、新しい価値を付加していこうとするための重要なきっかけとなる。ことに自然系のテーマを掲げた校区でのイベントでそのことが言えよう。安富のホタル繁殖実践、鹿谷のアユ釣り、坊勢の地魚料理教室などがその好例である。

安富では、ヒメボタルの乱舞が始まる6月、産卵用成虫の捕獲から始まり、卵を産ませ、幼虫を飼育し、年末に林田川に放流する、という長期の取り組みを行った。ホタルの舞う環境を保護、整備することの大切さを学び、命の尊さも実感する機会となった。鹿谷では、夢前川河川公園で家族と一緒にアユ釣りが行われた。楽しみながら、清流を守ることの重要性、アユを地域資源としてあらためて認識し、資源保護への関心を高めた。坊勢の地魚料理教室では、アナゴ、カキ、坊勢サバ(姫サバ)、舌ヒラメといった地場の魚を使った独自の料理がつくられ、ふるまわれた。「前どれ」のよさが確認され、漁業環境の保護と育成をいかに図っていくかが、地域の共通課題として再認識される良い機会となったようである。

どの地域でも、まさに、「(し) 知ろう (か) 考えよう (ま) 学ぼう飾磨」(飾磨中部校区) というキャッチフレーズを、あたかもなぞったように各種のプランが展開され、事業期間を通して有意義な地域学習が展開された。そして、多くの地域資源が発見され、それについての考察も行われ、自然と認識が深まっていったのである。

歴史・文化の本質に迫る努力を

これまで、地域資源の発見と、その情報についての学習、さらには資源の保護等について地域住民がどのように取り組んできたかを概観してきた。地域夢プラン事業によって、地域挙げての積極的なアプローチの様子が十分に見て取れるのではないだろうか。新しい発見はもとより、これまでぼんやりと認識していた地域の歴史や文化、その他の地域資源についての情報が、あらためて集約され、地域の人たちに向けて発信された。多くの住民の参加によって、これら集約された情報が、多方面にわたって受容され、それぞれの地域ごとに、地域文化、地域特性の大きな理解が広範囲に浸透していったことは大きな成果といえるだろう。

こうした実績を踏まえたうえで、多様に蓄積された成果を、どのように活かし、いかに発展させていくかが、今後の課題として浮かび上がってくる。その課題について、4つのポイントから検討し、いくつかの提案も含めて私見を述べてみたい。

まず、第一のポイントは、「継続性」という点である。事業の多くが、姫路市からの公的支援を受けて初めて実施したものであったが、この支援がなくなった後、どうするのかについての議論はまだ聞こえてこない。支援が切れれば中止、というところも多いだろう。確かに、事業展開を図るには、財政的裏付けが必要である。特にレジャーイベント的な行事については、従来通りの開催は困難になろう。しかし、多額の経費を必要としない事業もある。ボランティアによって継続できるものもある。なによりも、地域のために、あるいは研究のために「まだ続ける必要がある」という地域の欲求を呼び起こすような事業も見受けられる。そうしたテーマを精査し、継続して地道な取り組みが行われることを願っている。

二点目は、「情報発信の広域化」という点である。地域夢プランによって校区ごとにまとめられた地域資源についての情報は、基本的にはそれぞれの地域住民が「共有」すべきものではあるが、同時に、こうした情報は、他の校区にも発信されるのが望ましい。地域資源は、その地域だけのものではない。地域外の目に触れてこそ輝きを増すものがたくさんある。あそこに行けば、あんな良いものに出会える—そう思わせ、人の移動を促す情報を発信することが重要である。地域資源に対し内外の人々が自由にアプローチできる体制を作ること、交流人口を増やし、賑わいを演出するという地域活性化策にも大きく寄与することにつながるのである。

三点目は、前述の広域発信とも重なるが、校区ごとにまとめ上げられた個別の地域情報を、姫路市の全市民の資源として認識できるような「資源の共有化」の工夫が求められる。行政区画とか、校区といったエリア区分をフィールドにしてまとめられた各種の情報は、ほとんどの場合、そのエリアだけのものという認識に落ち着いてしまうものである。例えば、姫路城は姫路市のもの、柳田国男は福崎町のもの、といった感覚である。しかし、ことに、歴史文化情報についていえば、事物、事象のスケールが大きくなればなるほど、その及ぼす文化的影響力は、エリアを大きく超えて広がっていくもの、広がるべきものである。各校区単位でまとめられた

1 地域夢プランの歩み
～はじまりからこれまで～

2 地域夢プランのかたち
～取組の類型化～

3 地域夢プランのとりえ
～検証と未来へのアプローチ～
(1) 「姫路市地域夢プラン」の概要

3 地域夢プランのとりえ
～検証と未来へのアプローチ～
(2) 地域資源を活用したまちづくりと展望

4 地域資源の全リスト
～地区からの情報発信～
(1) 地区ごとの主な地域資源

4 地域資源の全リスト
～地区からの情報発信～
(2) 地域資源一覧

地域資源についても、同様のことがいえる。性空上人は書写のもの、恵便法師は増位のもの、吉備真備は広峰のものといった認識である。当然のことだが、地域資源は、校区の資源、財産であって、同時に姫路市全体の資源、財産でもあるのだ。ややもすると、校区内資源は、自校区内だけのものとして“独占所有”されがちである。一方で、他校区のものについては、“他人のもの”といった感覚が働き、ほとんど関心を払わないのが常である。

こうした感覚を「文化・資源の囲い込み」と呼んでいる。地域資源というのは、いわば公共財である。その価値は、立地地域だけでなく広く他地域でも共有されなければならない。逆に、周辺の地域においても、他のエリアが持つ資源の価値を認め、他人扱いを避けるべき性格のものである。そこで、地域夢プランにおいて取り上げられた資源については、どこの校区のものであろうと、少なくとも姫路市全体の資源である、という認識を、あらためて、強く持つ必要がある。今回の事業総括の中で、主な地域資源を一枚の姫路市マップに集約しビジュアルにまとめたことは、情報の広域発信、市民全体の「文化・資源の共有」という観点から、大きな意義がある。

四点目は、地域資源の「本質的価値の探究」という点である。特に歴史・文化にかかわる「資源」について、単に通り一遍の紹介に終わらずに、さらに深い情報を求めるべく、活動を続けてほしいと思う。歴史文化情報は、深めれば深めるほどに、その価値が高まり、関連情報が広がるものだ。そのことは、取り組む人々の興味をさらに広げる。いわゆる面白さが増すのである。そして、その深い探究によって、対象となった歴史文化事象の真の姿、つまり本質的価値が浮かび上がり、確立していくことになる。

地域資源と認識されたその地域の歴史文化情報の多くは、必ずと言っていいほど、日本全体の歴史文化事象に関連してくる。地域資源の本質的価値を探究し、その核心に迫っていくことは、単に、地域の歴史文化の理解にとどまらず、日本史、日本文化全体に対する認識、理解にもつながるということを忘れてはならない。校区から姫路市全域へという広がり的重要性を指摘したが、さらに、日本一世界といった「文化の情報流通」の大きな流れについても着目し、その流れを促すため、「本質的価値の探究」について絶えず関心を持ち続ける必要がある。地域夢プランの「発展形」として、こうした視点を持続することが最も重要なポイントとなるのではないだろうか。

「分権史観」への一步に一まとめに代えて

地域の歴史は、日本の歴史につながっている、と前項で述べた。当たり前のことのように、私たちは、地域の歴史を取り上げて学ぶ時、どうしても、日本史の中における地域史・郷土史という観点で見てしまう。全体史の中での位置づけは

ごく低く、単にその一部を占める“歴史のパーツ”として見るのが習い性となっているのである。そんな側面もなくはないが、そうではなくて、地域史は、もっと積極的に独自の歴史として捉え直す必要があると、私は考えている。日本各地の、いわゆる「地方」で起きた小さな歴史胎動が、やがて、日本全体を揺り動かしていくという事例を私たちはたくさん知っている。とりわけ、姫路・播磨の歴史文化を振り返って検証してみると、非常に多くの事象が、いわゆる「中央史」を動かしているという事実が浮かび上がってくる。他地域と比べても、そんな事例が極端に多く見受けられるのが、姫路・播磨の特質である。その背景と具体例は別の機会に譲ることにして、少し気張っていえば「“播磨の力”が日本史を動かした」とでもいえる事例が数多く存在するのである。

地域夢プラン事業の中でも、こうした事例がいくつか取り上げられている。卑弥呼の墓に比定される奈良の箸墓古墳と相似形だといわれる勝原の丁(よる)の瓢塚古墳▽出土品が重文に指定された四郷の宮山古墳▽日本五古風土記の一つ播磨国風土記▽書写山円教寺を開いた性空上人▽増位山随願寺の開祖・恵便法師▽置塩城跡や書写坂本城跡といった赤松氏関連遺跡▽黒田官兵衛関連史跡▽林田藩の河野鉄兜▽寛延一揆の滑甚兵衛▽姫路藩家老の河合道臣(寸翁)▽お夏清十郎▽銀の馬車道…などである。

いずれも、単に地域資源として片づけるわけにはいかないものばかりである。地域夢プラン事業の性格上、深く研究することについては特別に求められてはいないのだが、せつかくまとめた情報である。一般的な情報に終わらせず、さらに研究を深め、多彩で多様な付加価値をつけてみたい。こうして情報のブラッシュアップを図ることによって、地域情報は、次第にスケールを大きくしていく。例えば、瓢塚古墳と邪馬台国の関係、日本への仏教伝来と恵便法師の役割などが浮かび上がるはずである。赤松氏がいなければ室町幕府はなかったことも判明するかもしれないし、滑甚兵衛は単なる一揆の首謀者ではなく、新しい村落自治をも目指していた先進の義民であるという認識も生まれるかもしれない。河合道臣についても、その思想と行動を分析することによって明治以降の近代政治や経済にも大きな影響を及ぼしたことが見えてくるだろう。こうしたブラッシュアップ作業こそが、歴史文化の本質に迫る基本的で重要な行為なのである。

こうして歴史文化の本質に迫ることによって、歴史観が逆転するはずである。日本史の中の地方史という従来の歴史概念から、「地域の歴史が日本の歴史を動かす」という新しい歴史概念を実感できるのである。このように地方史から中央史を見るという、いわば「逆転の史観」を、私は「分権史観」と呼んでいる。

地方分権議論がかまびすしいが、分権の実態はなかなか見えてこない。今は、中央省庁の権限を地方に移すという、制度上の分権論議が先行しているが、究極の分権とは、自らの地域は、自らが治めるというものだろう。そのためには、地域の人々は、その地域のすべてのことについて精通していなければならない。地域の総合理解が強く求められることになるのだが、まず、自分たちの地域は、どんな

1 地域夢プランの歩み
～はじまりからこれまで～

2 地域夢プランのかたち
～取組の類型化～

3 地域夢プランのとりえ
～検証と未来へのアプローチ～
(1) 「姫路市地域夢プラン」の概要

3 地域夢プランのとりえ
～検証と未来へのアプローチ～
(2) 地域資源を活用したまちづくりと展望

4 地域資源の全リスト
～地区からの情報発信～
(1) 地区ごとの主な地域資源

4 地域資源の全リスト
～地区からの情報発信～
(2) 地域資源一覧

プロセスで今があるのか、といった認識を共有することが最低の条件となろう。「分権史観」は、そんな認識共有のための第一歩、つまり、「分権社会に向けての基礎工事」であると位置づけたい。

地域夢プラン事業では、歴史文化のみならず、経済、社会、自然などにもついて地域の基礎情報が丁寧に集約され、まとめ上げられた。これをさらに一歩進めて、「分権史観」の確立を先導役に、さまざまな分野で、分権社会への基礎工事を着実に進めていただきたい。地域夢プラン事業の実施に当たり、精力的にエネルギーを注いできた市民の一人ひとりが、その担い手になっていくはずである。

3 地域夢プランのとらえ方

～検証と未来へのアプローチ～

(2) 地域資源を活用したまちづくりと展望

地域課題解決システム開発チーム
(兵庫県立大学環境人間学部)

地域資源を活用したまちづくりと展望



兵庫県立大学環境人間学部
エコ・ヒューマン地域連携センター
地域課題解決システム開発チーム
内平隆之・田中雄隆・熊谷哲・豊田光世・
関哲洋・中桐齊之・井関崇博・中嶋一憲・
内海祐樹・横矢千尋・釜尾拓也・上谷成生

第1章 大学との連携による地域資源の活用の可能性

地域資源活用のための新たな枠組みとして、大学との連携を図ることも、今後有効な選択肢になるのではないのでしょうか。本章では、姫路市新在家にキャンパスがある兵庫県立大学環境人間学部エコ・ヒューマン地域連携センターと市内の各地域が一緒に取り組んでいる地域資源活用事例を報告しながら、地域資源を活用したまちづくりの展望について述べます。

1 大学との連携による地域資源の活用

(1) 大学の役割の変化

近年、大学に求められる役割は変化してきています。これまでの大学の役割は教育と研究の2本柱でしたが、2005年の中央教育審議会の答申以降、3つ目の柱として社会貢献を位置づける大学が増えてきています。従来のゼミや研究室単位で行われてきた個別研究者の関心に基づくものではなく、大学組織として、まちの活性化に継続的に貢献していくことを目指しています。具体的には、産学連携センターや地域連携センターなどを設置する動きを指します。さらに2012年の中央教育審議会の答申では、社会の変革エンジンとして、さらに踏み込んだ大学の役割が期待されています。

このような動きは我が国だけに留まりません。特に大学生が地域で実践するプロジェクトへの期待は世界的に高まりつつあります。たとえば、大学生の社会貢献プロジェクトのワールドカップである「enactus (旧称 SIFE 2012年10月より改名)※1」は、世界の39か国、1,600の大学、57,000人の学生が競う大規模な大会となっています。

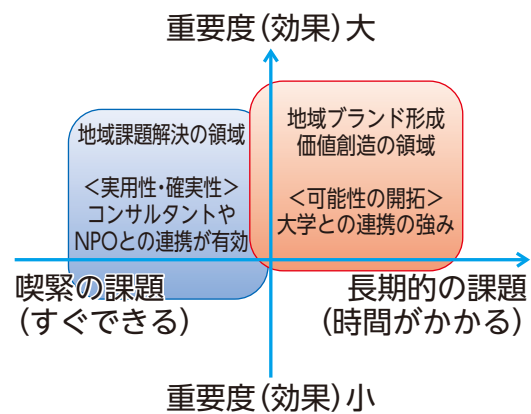
※1 この大会の特徴は、従来からのビジネスモデルなどのアイデアを競うのではなく、「起業家的アプローチで、どのチームが最も効果的に課題を持つ人をエンパワーメントしたか」という点を評価する点にある。

(2) 地域連携による地域ブランドの形成

では、どのような課題に大学と地域が連携して取り組むことが有効でしょうか。少子高齢化や価値観の多様化が進む現在、地域社会の担い手不足は大きな課題となっています。その結果、喫緊の地域課題に担い手を投入せざるを得ず、地域ブランドの形成のような価値の創造に中長期的に取り組む案件に対して、地域のマンパワーを投入する余力がなくなっている状況にあります。

大学の強みは可能性の開拓にあります。しかし、地域としては地域課題解決にすぐに直結する実用性が高い連携や、ボランティアなどのお手伝いとして都合のよい労働力の提供を期待しがちです。しかし、前者に対しては専門のNPOや、経験豊富なまちづくりコンサルタントの方が、大学よりも有効に機能するでしょう。後者に対しては、学生等の労働力に依存する以前に、自分たちの使命を見直し、地域社会を巻き込む組織力を高めるべきです。大学の強みを活かすためには、新たな可能性を探る、中長期的にみて重要度の高い案件での連携を試みるべきです。

特に、まちづくりの究極のゴールは地域ブランドを形成して価値を創造することにあります。大学と地域が一緒に地域の中長期的な可能性を開拓するために補完関係を構築し、戦略的に地域資源の活用に取り組むことが今後ますます必要となるのではないのでしょうか。本稿では、具体的にどのような実践が有効となるかについて考えてみたいと思います。



2 地域連携による地域資源活用の社会実験事例

(1) 兵庫県立大学環境人間学部エコ・ヒューマン地域連携センターの取り組み

兵庫県立大学環境人間学部では、2011年3月にエコ・ヒューマン地域連携センター(略称 EHC センター)を設置し、地域資源を活用した地域の価値創造への貢献に取り組んでいます。具体的には、①地域からの相談窓口の設置、②部活動にかかわる地域連携プロジェクトを推進する学生団体の登録制度、③その支援体制としてのアドバイザー制度の設置、④地域連携に関わる学生団体の活動を支える独自の基金の設置などを進めています。

この結果、これまでに実践されてきた教員の地域連携研究や研究室単位での地域貢献のみならず、17団体 225名の学生がさまざまな地域連携プロジェクトに挑戦しています。地域資源を活用した地元密着型のプロジェクトは、先に紹介したSIFE ワールドカップの国内予選において初出場で早稲田大学、京都大学に次いで、3位に入るなど高い評価を受けています。さらに、2011年10月にオフィス

1 地域夢プランの歩み
～はじまりからこれまで～

2 地域夢プランのかたち
～取組の類型化～

3 地域夢プランのとりえ方
～検証と未来へのアプローチ～
(1) 「姫路市地域夢プラン」の概要

(2) 3 地域夢プランのとりえ方
～検証と未来へのアプローチ～
地域資源を活用したまちづくりへの取組

4 地域資源の全リスト
～地区からの情報発信～
(1) 地区ごとの主な地域資源

(2) 4 地域資源の全リスト
～地区からの情報発信～
地域資源一覧

アワーを設置し、地域からの連携に関する相談に対応しています。2012年12月末までに、201件463名から地域連携の相談がありました。その内訳は、NPO等(57件179名)、行政(36件107名)、企業(16件30名)、学生(52件107名)、教員・大学関係者(38件56名)となっています。特に地域からの相談件数は増加傾向にあり、地域を元気にしたいという多様なニーズとやる気が自然に集まる場となっています。このようなさまざまな相談の中から、地域資源を活用した地域ブランド形成に資する学生プロジェクトを紹介します。

(2) 町屋を活用した食の価値創造

<町屋における場づくり>

「町屋カフェ・しょうあん」は、2012年7月に姫路城のすぐ側にある材木町の空き町屋を活用して始めました。もともと、非営利団体町屋再生塾が町屋の魅力を発信する場として改修し、その試みに共感した個人が町屋の魅力を伝えるカフェとして営業し、学生団体とも連携してイベントを実施してきました。しかし、事業主の都合で2012年3月に惜しまれつつ閉店してしまいました。そこで、その経営を学生プロジェクトとして引き継ぎ、地域の食や農を使った新たなメニューや商品開発を進め、紹介・提供する活動を進めています。



<活用コミュニティの形成>

学生プロジェクトは課外活動に位置づけられているため、土日営業を基本としています。毎月第2週の土日を「DEN」という地産地消の推進を目指す学生コミュニティが担当し、それ以外の土日を「ひめえん」という学生団体が「町屋でゆっくりを楽しむ」をコンセプトに営業しています。しょうあんのマネジメントは、エコ・ヒューマンブリッジ^{※2}が行っています。さまざまな学生コミュニティの強みをブリッジした企画を町屋で提供し、船場川周辺の地域の活性化への貢献を目指しています。さらに、地域農家のとれたて野菜の朝市や、福祉作業所の商品PRと販売代行などを試行しています。サポート環境として、夕雲社(町屋2Fにオフィスを開設)、町屋再生塾、地域の農家団体、調理専門学校、福祉作業所等との産学民連携を進めています。これにより、企画や商品・レシピ開発の実践的アドバイスを受けることができます。

※2 4回生になり引退した元学生リーダーを中心とする団体。他の学生団体のサポートやコンサルタントなどの中間支援を行う。

<はりまの食のブランドづくり支援>

地域の農にこだわったレシピ開発を進め、ランチを提供しています。特に訪れたお客様が、地域の食材で、夕食の一品を増やせるように、手軽に調理できるレシピ開発にこだわっています。たとえば、DENは福崎町の特産品である“もちむぎ”を使った新しいレシピ開発を福崎町より請け負っています。もちむぎの栄養機能である「下腹脂肪燃焼効果」を高めるランチを実験的に提供しました。

さらに姫路地しょうがを使った商品づくりにも挑戦しています。姫路では、姫路おでんや姫路ハイボールといったしょうがを使ったメニューが発信されてきましたが、さらなる地しょうがブランドの水平展開を目指しています。これにより農家の販路拡大と姫路地しょうがブランドの普及の一助となることを目指しています。具体的には、カフェ等で簡易に地しょうがメニューを提供できるように、その素材となる姫路地しょうがのシロップづくりや、こだわりの地しょうがごはんの開発などです。

以上のように、地域の食の新しいメニューの町屋での発信を通じて、地域の食と農の価値創造を図りながら、町屋を継続的に活用するコミュニティの形成を進めています。

(3) 地域資源を活用した観光価値の創造

<おもてなしの場づくり>

世界遺産の姫路城、ハリウッド映画の舞台となった書写山円教寺などの名高い文化資源を有し、京都、大阪、神戸、広島などの大都市・観光地から近いこともあり、多くの外国人が姫路を訪れています。しかしながら、姫路城を見学したあとすぐに姫路を離れてしまう外国人は少なくありません。より多くの人びとが、姫路にゆっくり滞在してみたいと思うよう、この町ならではの観光プログラムを開発・発信していくことが、重要な課題となっています。そこで、姫路コンシェルジュプロジェクトでは、地域資源の発掘と情報発信の工夫を考え、姫路の風土に根ざした観光を推進するための活動を行っています。

<姫路のものづくりを観光資源に>

2012年度は、「ものづくり体験」をテーマに、各体験スポットの外国人旅行客の受け入れ態勢を調査しました。言語の垣根を越えて楽しめる体験コースを7つセレクトし、英語のパンフレットを作成しました。2013年2月1～3日には、英語の観光情報サイトを運営する方々をゲストとして、ものづくり体験モニターツアーも実施し、プログラムの評価と情報発信の工夫について意見をいただきました。



1 地域夢プランの歩み
～はじまりから～

2 地域夢プランのかたち
～取組の類型化～

3 地域夢プランのとりえ
～検証と未来へのアプローチ～
(1) 「姫路市地域夢プラン」の概要

3 地域夢プランのとりえ
～検証と未来へのアプローチ～
(2) 地域資源を活用した「おもてなし」の展開

4 地域資源の全リスト
～地区からの情報発信～
(1) 地区ごとの主な地域資源

4 地域資源の全リスト
～地区からの情報発信～
(2) 地域資源一覧

<外国人が散策しやすいまちづくり>

また、こうしたツアーをきっかけに姫路のまちを広く散策してもらうためには、市内の重要交通機関であるバスに、外国人が乗りやすくなるよう工夫することも重要です。そこで、神姫バス株式会社との連携により、バスの乗り方を説明するポスターをつくり、ターミナルに設置しました。今後、英語版のバスルートマップの作成も検討しています。



(4) 里山を活用した暮らしの価値創造

<里山における場づくり>

香寺町では、「木の子」という学生団体が、2011年度から里山でのツリーハウスづくりをしています。これにより、里山の維持管理と環境教育の場づくりを進めています。2012年11月10日には、秋の里山まつりを実施しました。このイベントでは、学生が中心になり、かえっこバザールとワークショップを開催しました。このイベントは地域夢プラン展開事業による地域資源を活用する取り組みとして、地域の連合自治会と複数の学生団体が連携して取り組みました。参加者は地域住民を中心に約250名(学生スタッフ24名、子ども約70名を含む)となりました。

<活用コミュニティの形成>

かえっこバザールは不要になったおもちゃの交換を通じて子ども達がエコを学ぶワークショップです。ワークショップに参加することで、おもちゃ交換ポイントをもらうシステムです。かえっこバザールは、豊田ゼミの学生と木の子の学生が運営しました。ワークショップでは、どんぐりを使った工作教室(木の子)、紙芝居2件(学生団体PSS&STEP:海と空の約束、熊谷ゼミ:森と川と海のつながり)、里山の標本作り(熊谷ゼミ)、ネイチャービンゴ(豊田ゼミ学生)を実施しました。食事関係では学生団体「しょうあん」が里山カフェを開店し、里山の木を燃料とした石窯ピザの提供を行いました。学生活動とは別に里山の樹木等を学ぶ散策学習会、寄せ植え教室(NPO法人ハートフルガーデン中播磨)、コンサート(三色すみれ)を実施し、連合自治会が安全管理(駐車場への誘導や地域内への周知)をするなど、それぞれの強みを活かした活用が図られました。これにより、継続的に里山を活用する地域コミュニティの形成が図られています。



<里山でクリスマスイルミネーション>

さらに、里山でクリスマスイルミネーションの取組みを行っています。この取組みは、NPO 法人あかりの街ひめじが主催する第 10 回冬のイルミネーションコンテストにおいて、入賞(努力賞)の評価を得ることができました。イルミネーションを舞台にして12月25日には学生達と地域との連携を図るため地域住民の方々を招き、クリスマスイベントを実施しました。参加人数は100名程度で、多くの子ども達や地域の方と交流を図ることができました。

以上のように、多様な学生団体が連携して取り組んだ里山を活用する場づくりは、里山の新たな暮らしの価値と、里山を活用する新たなコミュニティを形成しつつあります。その結果、新聞への掲載や受賞などの実績となり、香寺地域が、里山と触れ合う暮らしのブランドを持つ地域として発信されています。

(5) 里川を活用した暮らしの価値創造

<船場川再生に向けて>

船場川は、市川を源流として姫路城の脇を通り姫路港に流れている二級河川です。かつて、この川は、物資輸送、農業用水、飲み水、洗濯、子ども達の遊び場などに利用され、人びとの生活に密着した「里川」でした。しかしながら、こうした機能の多くが今では失われています。また、生活排水の流入によって汚染が進むとともに、コンクリート護岸によって無機質な風景が目立つようになりました。その結果、地域の人びとの足が川から遠のいています。水路と化した船場川を、流域の人びとが愛着を持つ水辺へと再生していこうというのが、船場川プロジェクトの目標です。

水上橋のたもとには、兵庫県が設置したビオトープがあり、親水空間として整備されています。しかしながら、このビオトープはあまり活用されていません。生き物の棲息しやすい環境が十分に整っておらず、人が水辺と関わる機会もほとんどありません。船場川を姫路の里川として再生するためには、地域の人びとの川への愛着を深めるきっかけづくりが必要です。そこで、学生が流域の人びとに聞き取り調査を行いながら、船場川と地域の暮らしの歴史を明らかにするとともに、これまで船場川にほとんど足を運ぶことのなかった人びとと一緒に、川の再生活動に取り組む場をつくりました。



<川に入る機会をつくる>

流域住民の方と話し合いを行い、まずは子ども達が川に近づくきっかけをつくることにしました。水上橋たもとの船場川ビオトープで、小さな自然再生の試みとして、河床の石を転がす競争を2012年9月2日に実施することにしました。水上夢倶楽部の協力を得て、水上小学校の生徒約20名と保護者の方々が参加してくれることになりました。

しかしながら、当日ビオトープへ行ってみると、非常に水嵩が増していて、子ども達が川に入って河床を整備することはできませんでした。急遽、参加していた保護者の方が中心となって、水中に繁茂していた藻を刈り取る作業を行いました。子ども達も、飛び石の上から、藻を集めて運ぶ手伝いをしてくれました。今まで全く船場川に関わったことのない人たちが、楽しみながら川に近づく機会をつくることができました。

里川再生には、大きな二つの使命があります。第一に、生き物が棲息しやすい環境を整備すること、第二に、人びとの水辺との関わりを生み出すことです。したがって、里川を再生するためには継続的な取り組みが必要となります。これからも流域の方々との対話を重ね、船場川の魅力づくりにつながる活動を進めていきます。

(6) 大学との連携による活用の可能性の開拓

以上のように、地域資源の活用による地域ブランド形成のための新たな枠組みとして、大学との連携を図ることも有効なアプローチであると言えます。なぜなら、学生団体の連携により安定したマンパワーが投入できる仕組みが確立されつつあり、学生団体の専門性や強みを組み合わせることで、地域資源活用の可能性の開拓も可能となっているからです。

今後のさらなる発展のためには、学生団体が必要に応じて、実践的なアドバイスを受けることができるよう、支援コミュニティづくりを進めるべきです。大学と地域が連携して中長期的な視点から、地域ブランド形成へ向けて地域資源活用の可能性の開拓を図るとともに、支援コミュニティが継続的な活用の担い手になるような連携戦略が必要です。

さらに、地域のニーズは多種多様であるため、地域ブランドの構築のために、学生のマンパワーを重点的にどこに投入すべきかについて戦略が必要となります。そのために、産学官民連携の企画の場づくりが必要となるのではないのでしょうか。

第2章 地域夢プラン事業への提言

以上のように、大学との連携による活用事例を示してきましたが、今後の地域資源を活かしたまちづくりはどのように展開していくべきでしょうか。この点について考察を進めて、地域夢プラン事業への提言としたいと思います。

1 地域資源と地域の豊かさ

(1) 地域資源は、時代ごとの地域の豊かさ像に応じて変化する。

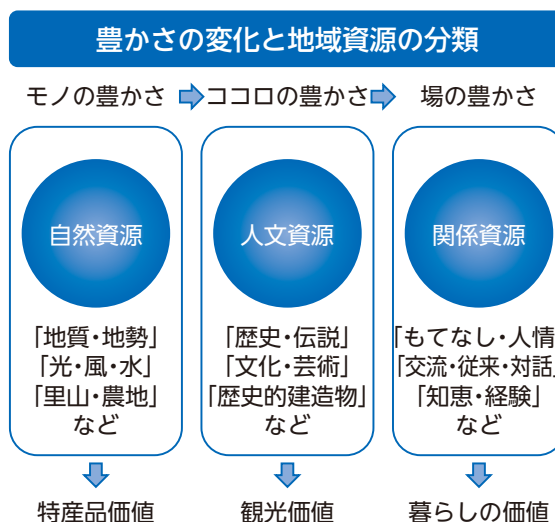
地域資源とは「地域に固定され地域開発に利用可能な資源」とも定義できます。かつては、「モノの豊かさ」に役立つものを指し、特に「自然資源」のことを指していました。近年、「ココロの豊かさ」に役立つ資源も、新たな地域資源として位置づけられるようになってきています。具体的には、「歴史・伝説」、「文化・芸術」、「伝統技能」、「歴史的建造物」などが、ココロの豊かさ結びつく地域資源として注目されています。

言うまでもなく、時代背景やライフスタイルの変化に応じて、「地域社会が求める豊かさ」は変化します。そのため、地域が求める豊かさの変化に応じて、地域資源の持続可能な活用を図ることがまちを元気にするために必要となります。ここで言う持続可能性とは、「将来世代のニーズを損なうことなく、現代世代のニーズを満たす」ことです。つまり将来世代の豊かさにつながる地域資源活用の可能性を減じることなく、現代世代の豊かさにつながる地域資源の発見とまちを元気にする活用を図る必要があります。

(2) 地域のブランドと暮らしの価値創造

将来世代の豊かさを損なわず、現代世代の豊かさにつながる地域資源の活用の究極の目標とは何でしょうか。その一つに地域ブランドの形成があります。地域ブランドと言うと特産品ブランドや観光地ブランドなどがまっさきに思い浮かびます。もちろん、モノが売れ、人がたくさん訪れるということも大事なブランドなのですが、真の地域ブランドとは、「この街に住みたい・住み続けたい」と思うようになることです。

そのためには、地域が固有に持つ歴史や文化、自然、産業、生活、コミュニティといった有形無形の地域資源、つまり、その場所にしかない資源の利活用が重要になってきます。すなわち、地域資源を活用した場づくりを通して、現代に生きる人々の暮らしの価値と結び合わせていくことが、地域ブランド化につながると考えられます。ここで言う暮らしの価値とは、地域資源と関わることで生まれる、地域への誇りや愛着を指します。いわば、関わる人にとって地域が真の居場所になり得るかどうかが問われているのです。



1 地域夢プランの歩み
～はじまりから～

2 地域夢プランのかたち
～取組の類型化～

3 地域夢プランのとりえ
～検証と未来へのアプローチ～
(1) 「姫路市地域夢プラン」の概要

3 地域夢プランのとりえ
～検証と未来へのアプローチ～
(2) 地域資源を活用したまちづくりと展望

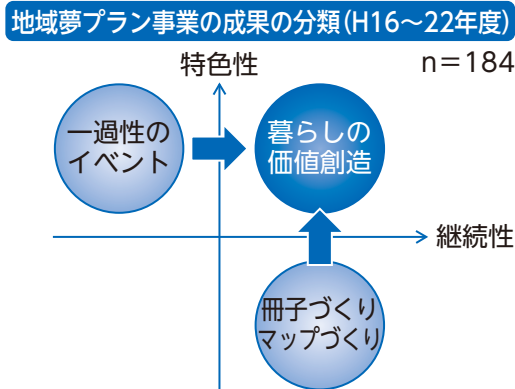
4 地域資源の全リスト
～地区からの情報発信～
(1) 地区ごとの主な地域資源

4 地域資源の全リスト
～地区からの情報発信～
(2) 地域資源別

(3) 特色性と継続性のある地域資源活用

姫路市では、これまでに地域夢プランを中心に、地域資源情報の蓄積を進めてきました。たとえば、マップづくりや、地域資源の歴史や聞き取り調査などをまとめた冊子づくりなどです。このような地域資源情報の蓄積は、未来世代の可能性を減じないという観点から高く評価できます。しかしながら、地域資源

情報が蓄積されれば蓄積されるほど、あれもこれもという発信になり、その特色が捉えにくくなる問題点があります。地域ブランドの形成のためには、外部（ソト）にも内部（ウチ）に対しても、特色ある発信を、継続的に行うことが必要不可欠となります。端的に言えば、特色がなければ、おもしろさも伝わりにくくなり、関心を集めにくくなります。日常性がなければ暮らしの価値として浸透しません。暮らしの価値創造を図るためには、従来の情報蓄積から、特色性と継続性がある地域資源の活用が求められているのではないのでしょうか。



(4) 暮らしの価値創造には「場の豊かさ」が地域資源となる

この暮らしの価値創造のためには、「場の豊かさ」が必要不可欠です。場とは、人と人が集まり対話・交流する機会のことです。経営学において、企業のイノベーション^{※3}やナレッジマネジメント^{※4}において重要な概念です。場において、人と出会い対話が促進することで、情報や感情が集まります。その結果、相互に刺激を受けて、自分がやりたいこと（役割）や、中長期的になし得ること（意味）を発見することにつながります。つまり、地域と関わる内発的な動機が高まる機会となり、創発的な戦略を共有する学びのコミュニティの形成につながります。

さらに、場の豊かさは、「鹿を追う者は山を見ず」を防ぐ効果があります。この故事は、目先の利益を追っている者は、それ以外のことが見えなくなり、他のことに余裕がなくなることを指します。効率的な経営のために高度に組織化専門化された現代社会においては、地域の価値観は多様化しており、どのような立場にあっても、一部しか常に見ることができず、中長期的な戦略を持ちえない課題があります。その前提で地域資源活用に取り組む必要があります。自分たちの地域の視点からのみで活用を図るのではなく、産学官民の多様なセクターから集まる情報を統合し学びあうことで、その全体像から中長期的な地域ブランド形成のための戦略構築が可能となります。そのためにも多層な場づくりと学びのコミュニティの形成

※3 新しいアイデアから社会的意義のある新たな価値を創造し、社会的に大きな変化をもたらすこと。

※4 個人の持つ知識や情報を組織全体で共有し、有効に活用することで業績を上げようという経営手法のこと。

を進めながら、産学官民連携による創発的な地域ブランド形成に取り組むことが大切です。

具体的には、「もてなし・人情・娯楽」、「交流・往来・対話」、「知恵・経験の継承」などの関係資源が暮らしの価値創造に資する地域資源となると整理できます。このような関係資源を豊かにしていくことを通じて、おもしろがったり、うれしがる人材を、地域の内外から巻き込むことが大切です。

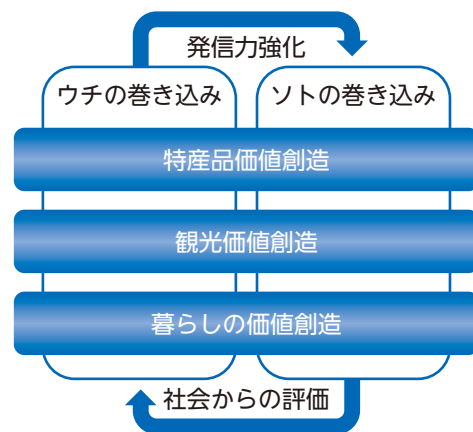
(5) 地域の場を豊かにするウチとソトの役割

特に、地域ブランド形成において、「地域の外部への発信だけではなく、内部の住民を巻き込むことが、強い地域ブランドの構築に欠かせない」と言われています。それは会社と同様であり、「ウチ」の地域住民の誇りが「ソト」への発信力の強化につながり、反対に「ソト」の社会からの評価が「ウチ」の地域住民の満足度や誇りの向上につながるとされているからです。地域の「ウチ」と「ソト」の好循環を生み出すことがポイントとなります。地域資源の活用を通じて、ウチを巻き込む仕組みをつくっていくことが、継続的な活用を促進し、暮らしの価値創造の第一歩となります。

また、外を巻き込むことは、新しい未知の可能性を開拓する上で重要です。「価値ある情報の伝達やイノベーションの伝播においては、家族や親友、同じ職場の仲間のような強いネットワーク（強い紐帯）よりも、ちょっとした知り合いや知人のような弱いネットワーク（弱い紐帯）が重要である。」という社会学の理論があります（弱い紐帯の強さ）。簡単に言えば、身近な人たちの持つ情報や人間関係は当事者と同じようなものですが、ちょっとした知り合いの持つ情報や人間関係は当事者の持つ情報や人間関係と大きく違っている可能性が高いということです。その結果、今まで関係の薄かった弱いネットワークの人たちが持っている未知の情報や新しい人間関係と出会う可能性が高くなり、新しい価値創造が起こる可能性が高まるという考え方です。つまり「弱い紐帯は強いネットワーク同士をつなげる“ブリッジ（連携）”として働き、情報が広く伝播するうえで非常に重要な役割を果たす」こととなります。

ゆえに、ソトを巻き込むことは、特色ある活用の可能性を開発する上で重要な要点になると言えます。さらに連携で他の強いネットワークと結びつくことにより、情報発信力も強くなり、先に示したようにソトからウチへのフィードバックも大きくなる地域ブランドの形成を図るうえでのスケールメリットも得られます。

地域資源活用の特色化と地域ブランドの形成



1 地域夢プランの歩み
（はじまりからこれまで）

2 地域夢プランのかたち
（取組の類型化）

3 地域夢プランのとりえ方
（検証と未来へのアプローチ）
(1) 「姫路市地域夢プラン」の概要

3 地域夢プランのとりえ方
（検証と未来へのアプローチ）
(2) 地域資源を活用したまちづくりと展望

4 地域資源の全リスト
（地区からの情報発信）
(1) 地区ごとの主な地域資源

4 地域資源の全リスト
（地区からの情報発信）
(2) 地域資源一覧

終章 おわりに

地域資源の活用については、これまでのマップづくりや冊子づくりなどの情報蓄積から、特色性と継続性のある活用の開発支援に発展的に展開すべきです。そして、地域ブランドの形成を目指してはいかがでしょうか。そのためには、従来の地域内だけの強いネットワークを基盤とする閉じた関係性からの新たな可能性の開発ではなく、強いネットワーク同士を新たに結びつける場づくりが有効です。なぜなら、地域の場が豊かになり、多様な価値観の共有が図られることで、地域を豊かにするための全体像をとらえる機会となり、創発的な戦略と地域資源を活用する新たなコミュニティの形成し得る機会を増やすからです。特に、未知の情報に出会い、やる気を高める機会が増える効果が期待できます。その結果、ウチとソトの人材を巻き込み、地域ブランドの形成の一助となるのではないのでしょうか。

参考文献

- 1) 目瀬守男 (1990) 「地域資源管理学」、明文書房
- 2) 博報堂地ブランドプロジェクト編 (2006) 「地ブランド」、弘文堂
- 3) 和田充夫ほか (2009) 「地域ブランドマネジメント」、有斐閣
- 4) 伊丹敬之 (2005) 「場の論理とマネジメント」、東洋経済新聞社
- 5) 野中郁次郎・紺野登 (2003) 「知識創造の方法論—ナレッジワーカーの作法」、東洋経済新聞社